**相馬 兎二 （そうま・とじ）**

**１、プロフィール**

俳人。高松玉麗の松濤社に創立同人として参加。「寂光」創刊、維持同人として積極的に寄与。昭和34年青森俳句会「暖鳥」に同人として加わる。昭和55年暖鳥賞受賞。

＜生没＞

1903（明治36）年３月９日～1994（平成６）年３月25日

＜代表作＞

句集『蟻の列』（暖鳥文庫４）

＜青森との関わり＞

藤田鉱業株式会社青森電煉所に入社。職場に俳句会があり、若紫の号で参加。続けて天位に入り自身と励みを覚える。

**２、作家解説**

明治36年３月９日、青森市松森町２番地に父、相馬春吉、母かすの三男として生まれる。本名春治（はるじ）。兄二人夭逝、弟妹各一人。明治42年３月浦町尋常小学校に入学。大正４年浦町尋常高等小学校に入学、担任金芳麿がクラス全員に「凧」（いかのぼり）の題で俳句をつくらせた。春治の「清正も賴光もいるなりいかのぼり」など五句とも佳作としてあげられた。俳句への芽生えがしずかに湧きはじめていた。

卒業の頃、第一次世界大戦の軍需産業は活気を帯び、藤田鉱業株式会社に就職、職場の俳句会に若紫の号で参加、句会で二度も続けて天位に入り、自信と励みを覚える。また機関誌「かりがね」に投稿、上司に菊地柾次郎がおり、短歌の指導も受ける。大正８年ベルサイユ講和条約と共に藤田鉱業も縮小閉鎖、やがて青森電燈会社に移る。11年頃には野呂冬山らの川柳吟社に入り、「うさぎ」の号で川柳もはじめる。淡谷悠蔵らの「黎明」に短歌を投稿、「兎二」の筆名をはじめて使う。ほぼ８年ほどで俳句以外は止め、一筋の道となる。

大正13年10月高松玉麗の松濤社に創立同人として参加。14年９月、結社句集『おぼろ』、15年９月『海丹』、昭和２年11月『茄子籠』、３年10月『ゆきのした』刊行、年刊句集の前駆となる。５年４月「寂光」創刊以来毎月投句を続け、社業としての県句集発刊に参画した。昭和２年結婚、一男四女の子宝に恵まれるが二女が女学校卒業後急逝する。15年五所川原営業所に転勤、終戦前の豪雪の時母が長逝。24年長女正子が小林正三郎に嫁す。

退職後は俳句に専念、県俳句大会に二年連続天位獲得、34年頃より青森俳句会の「暖鳥」に参加。55年７月、年度暖鳥賞受賞、56年度暖鳥４月号に特別作品３句、同年７月、暖鳥創刊35周年記念俳句大会で最高位となる。「片陰にをりて此の世に用残る」 63年句集『蟻の列』を暖鳥文庫４として刊行。平成６年３月25日逝去。享年91。

**３、資料紹介**

〇相馬 兎二句集『蟻の列』（暖鳥文庫４）

図書

1988（昭和63）年３月１日

177㎜×123㎜

兎二俳句に魅かれる人の声を受け、青森俳句会が暖鳥文庫として刊行。同人の津川あいがまとめ、1600句の暖鳥発表句より新谷ひろし氏が328句を選んだ。